佐伯順子氏
（同志社大学大学院教授）

略歴
1961年東京都生まれ。1984年学習院大学文学部卒業、1986年東京大学大学院博士課程修了。学術博士。帝塚山学院大学教授、国立民族学博物館共同研究員、国際日本文化研究センター客員助教授などを経て、2002年から現職。専門は比較文化史。既成の概念を超えた女性文化史を主に著し、古典から近代にかけてのセクシュアリティー表象を探求している。

文学では水、橋、都市の景観が人間の心情と結び付けられ、印象深い景観を形成

●日本の伝統文化の中で、風景が印象深く読み込まれた文学的事例は、文学や歌舞伎の心中もの等に見られる。そこには命が尽きる最後の瞬間に目に映る風景が印象深く描かれている。

●近松門左衛門の「曽根崎心中」では、お初と徳兵衛が梅田の橋を渡っていく時に嘆きの涙やこれまでの人生が橋、川といった光景の中で印象深く語られている。

●心中の舞台となる曽根崎の森では、水や森などの自然の風景と橋という人工物が解け合い、印象深い風景を形成している。それが人間の心理と結びついている。

●「心中天網島」の名残の橋尽くしの場面では、橋を順々に渡っていくことにより心中する男女の感情が高ぶっていく。景観と感情が上手く融合している事例である。また、野田の入江に靄がかかり、山の端が白く霞んで見える自然の光景と水辺の光景が重要な要素として語られている。

●永井荷風の「日和下駄」にもあるように、世界的に見ても都市美は水によるところが大きく、近代化以前の日本では歴史的伝統を形成する意義を持っている。

景観に四季を織り込むことが重要

●日本の景観を形成するものとして四季を織り込んでいくことが重要である。文学の中にも四季の風景と人間の心情が共鳴していく事例が多くある。

水、橋による景観と近代的景観とが融合することは可能

●泉鏡花の「日本橋」では、東京駅にほど近い一石橋で男女が印象深い出会いをする。恋が芽生える橋の上での光景を月や雲が盛り上げている。鏡花は、近代的な建築や電車といった装置も江戸情緒の中に上手く融合させて文学の中に風景を描写するという特徴があり、必ずしも近代化が風景を壊すとは限らない。

絵や歌にしたいかどうか、物語性を感じられるかどうかが良い風景の判断基準

●絵にしたい風景が、良い風景かどうかの判断材料になるのではないか。また、絵にしたい光景に水辺の光景があるのではないか。

●「大阪案内」の中の大阪百景の水辺の写真を見ると、橋は近代化されているもののまだ絵になる。スケッチにも大阪の風景、水辺の風景が描かれている。

●舞台の中に織り込まれる風景、物語性が感じられる景観というものが、非常に魅力的な景観なのではないか。

●谷崎潤一郎は水無瀬あたりの風景を小説に取り入れているが、歌に詠みたくなる風景が十五夜の月の光とともに関西に広がっていることに感銘を深くしている。

近代化の中で美しい水辺の景観を喪失

●伝統を活かしつつ自然と人工物を調和させて景観が形成されているが、近代化の中で建築物や橋梁が西洋風になっていき景観が台無しになっていくことを荷風は嘆いている。残念ながら、大正3年の荷風が嘆いたこの状況がそのまま続いてしまった。

●経済成長を考えると、景観ばかりにこだわってはいられないかもしれないが、かつての美しい景観を振り返ることも必要ではないか。

●歌舞伎の舞台では川、橋、背後の瓦屋根の街並み、柳、月による非常に美しいコンビネーションが見られる。しかし、橋と川のコンビネーションはコンクリートの建物や高速道路によってダメになってしまっている。

季節感、雪月花が織り込まれた豊かな景観が大切

●ノスタルジックな事例紹介だが、文学には川や橋や建築物などに季節感、雪月花を織り込むことにより、人間の心が豊かになっていく景観が描かれている。そのような景観が実際にもあれば良いと思う。